

III. Energy-Based Quantum Medicine の創始—現代医学の盲点と新しい医学

一、医学と量子物理学と三種のエネルギーについて

現代の医学には二十世紀最大の科学の成果であるエネルギーをはじめとする量子物理学の考え方が、ほぼ完璧に欠落していて、質量のある物質のみで生命の仕組みや病気や健康が研究されている。今日医学で無視されているエネルギーには、一、環境エネルギー 二、細胞小器官ミトコンドリアのエネルギー代謝 三、動物の動きで生ずる生体力学エネルギーの三者がある。これらの不適當でも病気が起きる。

著者は二十年近く前に哺乳動物の筋肉内に多孔性の生体活性セラミックスを移植して、人工的に骨髓造血細胞を造骨細胞と共に誘導することに成功し、日本人工臓器学会賞を受けた。これは、筋肉内の血流という重力にもとづく流体力学エネルギーと共役した流動電位の作用により、未分化間葉系の幹細胞（ステムセル）から造血・造骨細胞を誘導するものである。電位によるステムセルの遺伝子発現で細胞の誘導分化が起こるということを一連の研究で明らかにした。重力作用は動物の行動様式を通して間接的に流動電位を生ずる血圧に働きかける。重力は生命体に作用し流動電位に翻訳されてはじめて遺伝子発現が起こり体のシステムが変化する。これが脊椎動物の進化の原動力の一つなのである。

以上の事から次のような量子物理学の公理(axioms)を導き出すことが出来た。

一、宇宙はエネルギーと物質より成る、すなわち空間と時間と質量のある物質から成る。時間も空間もエネルギーである。 二、重力は質量のある物質にそなわった本性の一部であり、質量のある物質のみに作用し(ニュートン・万有引力の法則)エネルギーには作用しない(ニシハラ)。加速度と重力は区別できない(アインシュタイン)。質量のある物質は加速することができるが(ニュートン)、質量の無いエネルギーは加速することは出来ない(ニシハラ)。したがって重力は質量のない光には作用しない。よってブラックホールは光が吸い込まれるのではなくて光が止まった状態のことである。 三、重力も光もともに質量のある物質にそなわった本性の一部で互に相補的關係にある(ニシハラ)。真空をどんなに加熱しても光は生じないが物質(気体)を加熱すると光を発する。この時に発光体は、クォークレベルで質量(重力)を失う。エネルギーも素粒子もともに温度に依存した固有のスピードを持つ(ニシハラ)。 四、質量のある物質とないエネルギーの仲を取り持つものが質量のある電子と素粒子である(ニシハラ)。 五、超微弱な重力を感知しないで、活用して生きる多細胞動物は、重力作用が流動電位と共に生ずる血液の流体力学エネルギーに変換され、この電位による遺伝子発現と栄養が分解・代謝されて生ずるエネルギーによって、生命活動が維持される(ニシハラ)。

こうして量子物理学の中にはじめて重力に深く関与するものとして動物が入って来たのである。これで漸くにして量子物理学の最大で最後の重力の謎が解けたのだ。

医学領域への量子物理学の導入の成果が、今日画像診断に革新をもたらしている CT スキャンや NMR だ。これは量子電磁波動物物理学の電子スピン共鳴や核磁気共鳴現象の研究から得られた量子の絡み合い現象(量子もつれ=entanglement)をコンピュータ断層写真技術に応用した成果である。しかし現実の医学の診断部門では、これらの画像や細胞病理学診断だけでは、癌か微生物による肉芽腫かの診断は今や不可能だ。

二、ミトコンドリア病理学=エネルギー病理学の創始

著者の40年前の学位論文は、ミトコンドリアの突然変異発生の原因究明の分子生物学的な研究である。その研究結果と最近の思考研究とを統合研究したところミトコンドリアが高等動物の細胞内小生命体で、動物の体を国にたとえた時、これがヒトの役割をして働いて統一個体として統制している事を明示した。そこで細胞病理学をミトコンドリア病理学に改め、病気の発生の原因も明示した。細胞レベルでは病気はミトコンドリアが次の六つの要因で障害を受けた時に発症する。一、毒物 二、栄養障害(水・O₂を含む) 三、微生物・寄生虫 四、エネルギーの不適合 五、移植の不適合 六、生命エネルギーの

スピリチュアリティ・恐怖・信仰・ストレス・親族の死

六の生命エネルギーの主体は脳のニューロンのミトコンドリアの働きによる。昔からいわれた第六感はこのニューロン内のミトコンドリアの共鳴現象を感知することだ。これらの細胞内レベルの病気の原因は、エネルギーが直接外界から細胞内ミトコンドリアに作用するほかはすべて血液を介して細胞内に運ばれてくるものである。

三、量子もつれ（エンタングルメント）とミトコンドリアリゾナンス診断法

地中の水脈を探る方法として昔から使われているダウジングという方法があるが、これは水が流れると流動電位が生じ、この電位を検者の脳内の手の筋肉を動かすニューロン内のミトコンドリアの共鳴現象によって感知して、杖を持つ手が自動的に動いて、これにより水脈の存在を判断する手法で、生物共鳴（バイオリゾナンス）現象の応用手法である。この手法を病人に応用したのが **Energy-Based Quantum Medicine** だ。

CT スキャンも NMR も量子もつれ（entanglement）をコンピューター断層画像に撮影したのだから、その画像に含まれるクォークレベルの情報を知ることにより病気の診断と治療は容易で確実なものとなる。

すべての細胞内には電子伝達系による呼吸をもっぱらとするミトコンドリアが存在し、細胞内に毒物や細菌・ウイルスの汚染が生ずればこの電子流に障害が生ずる。これが細胞レベルの免疫病である。これを検者が検知する事が出来るのだ。これが新しいミトコンドリアリゾナンス診断法 **Mitochondrial Resonance Diagnostics (MRD)** である。これにより難病の原因の究明がきわめて容易となった。難治性の免疫病も、癌も精神病も、病原微生物とは無縁の口や喉や腸内の常在性の微生物が白血球（顆粒球）によって体中にばらまかれ、色々な器官や組織の細胞群に細胞内感染を引き起こして発症する事が明らかとなったのだ。治療はこの細胞内感染症を治し、ミトコンドリアの元気を回復すればよいのだから、これらの三種の疾患の治療法は殆どすべて同じである。完治することがこの考え方の正しさを示すエヴィデンスだ。従来の方法に比べて診断も治療も極めてやさしいうえに確実になった。難治性疾患も手遅れでないかぎり治すことが可能となったのだ。

四、バイオリゾナンス（バイディジタルオーリング）テスト

電子スピン共鳴やエネルギー、光のことがわからなければ、オーリングテストのことも皆目わからないことになる。これを理解するには、まず細胞と細胞内小器官のミトコンドリアと細胞の中に入り込んで不顕性（はっきりしない）感染をおこす細胞内感染症を理解しなければならない。ヒトの口腔、咽頭、腸管内におびただしい数で存在する殆ど病原性のないウイルスと細菌が、ある条件下で容易に大量にステムセル（未分化間葉細胞）内に取り込まれて、これが白血球の顆粒球となり、全身を巡る時にこれらのバイ菌をいたる所の器官や組織に播種（ばらまく）すると、病原性のない微生物は細胞内にまで入り込み細胞内感染症を発症する。今日このことを重大な事実として認識している免疫学者、細菌学者、臨床医家は殆ど皆無である。ミトコンドリアが太古に寄生したリケッチアに似たバクテリアであり、ウイルスは細胞内にしか感染することが出来ないことすら殆ど知らないで世界中の臨床医家が盲目的医療行為で空回りしているのである。4、50 年前には大人で日和見感染症、子供で自家中毒と呼ばれた多くの日常的病気があったが、これらは骨休め不足の過労と「冷え」と「口呼吸」や「しゃべりすぎ」で発症するのである。つまりカゼがこじれたもので「家庭の医学」の対象となる病気であった。また、悪いものを食べて5分か10分してできる蕁麻疹も、弱毒菌が腸から顆粒球に取り込まれて皮下組織の細胞群に播種されて発症する。腸で取り込んだ微生物の消化が皮下組織の間葉細胞内で完了すると30分から

5 時間の中に蕁麻疹は消失して治癒する。皮下組織の細胞群が腸内の弱毒菌の消化の場なのである。腸や喉が体温より著しく下がると、冷血動物のシステムが作動して、パイエル板のM細胞のステムセル内に大量に腸内常在菌やウイルスが取り込まれて顆粒球症を発し、これが大量に皮下組織に播種されると蕁麻疹症状を発症する。氷水やアイスクリームを常用するヒトにアトピー皮炎が多いのはこのためである。また、口呼吸でも顆粒球症を発症するから同様である。脳の神経細胞と皮膚の上皮細胞はともに外胚葉から生ずるから、アトピー皮炎がこじれると脳の細胞内にアトピー性の炎症に近似した脳内のニューロンやグリアセルに細胞内感染症が起きることがしばしば臨床で経験される。口呼吸と氷水が重なると症状は当然ひどくなる。脳は筋肉と共役として発生するから脳は筋肉のシステムである。脊椎動物の源のホヤが筋肉を失うと植物になるのだが、この時同時にラマルクの用不用の法則に則って脳と神経も無くなる。これさえ知っていれば、熱性ケイレンは脳症、つまり脳に病原性のない細菌かウイルスが細胞内感染しているということが瞬時にわかるのである。すべての細胞（成熟した赤血球以外の）内にミトコンドリアが 800~3000 粒存在する。ミトコンドリアの本務は、電子伝達系による酸化リン酸化でエネルギー物質を産生することである。これにより生命のいとなみのすべてが遂行されるのである。

すべての物質は、電子スピンしており、この物質（細胞を含む）と脳の筋肉を支配するニューロンのミトコンドリアの電子伝達系とは互いに電子スピン共鳴する。共鳴の程度は筋力に反映される。指の筋肉がヒトでは最も疲労しにくいので指をリング状にして使うと長期間反復テストが可能である。細胞内感染すると、感染した微生物によってミトコンドリアが障害されるために細胞機能が荒廃する。微生物に対して有効で最適量の抗生剤や抗ウイルス剤、ビタミン、ミネラル、補酵素が指の筋力の共鳴で容易に判定される。細胞内感染症の程度によりも癌種か潰瘍か肉芽腫かが判定される。

IV、どうして西洋医学が壊れたかを検証する

著者が 1966 年から東大病院の口腔外科教室で研究と診療を 2001 年迄ちょうど 35 年間続けた後にリタイアした年に日本免疫病治療研究会を立ち上げ、同時にこの実践の場として東京六本木のヒルズの間近に「顔と口腔の医学」西原研究所を設立した。

十二支が一廻りした 12 年前のことである。その頃は昔殆ど無かったアレルギー疾患がまさかりであった。ことに赤ちゃんでは、アトピー皮膚疾患や小児の喘息、川崎病や小児リウマチ、発達遅延等次々に障害が連続して発症するため、アレルギーマーチとも呼ばれていた頃のことだ。アレルギー科は大人も子供も大いに繁盛していた。著者はすでに今から 20 年程前から、アレルギー病と呼ばれる難治性の病気の大半が口呼吸と冷飲食を好む嗜好と寝不足（骨休め不足）の三つ揃いで起こる日和見感染症である事をつき突めていた。これは、自分の口や鼻腔、喉や胃腸、泌尿器等に常時巣食っている殆ど無害の常在性の微生物（細菌とウイルス）が白血球に取り込まれると、これが顆粒球となって血中を巡り、体調の日和を見て体の様々な部位に運ばれ播種（ばらまかれ）され、その部位の組織や器官をつくっている細胞群に細胞内感染症を発症する病気である。これら三つ揃いの生活習慣の誤りという不適当な生体力学のエネルギーによって体の中を巡る血液の中の白血球内に細菌が抱えられて病気になるのだ。これは実はやはりアレルギーではないのだが、40 年前から常在菌の感染症という考えが無くなり、原因不明のアレルギーとの考え方がはやり出したのだ。アトピー皮膚炎を驚くほど高額な料金でローンを組ん

で長期間にわたる治療を行うというエステサロンもこの頃はなごかりだった。リタイアする5年前頃から口呼吸と冷酒と寝不足を止めると、難治性疾患の喘息、アトピー皮炎、難治性気管支炎、リウマチ、膠原病、腎炎や赤ちゃんや幼児のアトピー皮炎や湿疹が実によく治るのでせつせと治しては本に書いていた。リタイアの時には一度に8冊の本を出した。診療所をはじめた頃には、アトピー皮炎を治すエステサロンを全国的に展開していた経営者が著者に顧問となって一緒に講演しようとの依頼があり、良く治っている赤ちゃんから大人までもの写真を見せられた。写真では良く治っていたので引き受けた。一緒に講演してみてもびっくりした。著者が、離乳食アトピーの1才の子を3、4日で完治させた症例を示し、その治療法と完治したわけを解説した。口呼吸にともなう早すぎる離乳食で腸内細菌が大人型になり、それが授乳期間中（3才迄）は自在に血中に吸収されて赤ちゃんの重症じんましんが出るが、これをアトピーっ子と呼んでいるから、離乳食を一切止めて40℃前後の乳児用ミルクにして哺乳瓶で与え、同時に四六時中おしゃぶりを与えて吸啜と鼻呼吸を鍛えるのだ。さすれば、腸内は大腸菌からビヒズス菌に変わり、2-3日でアトピーは完治するのだ。これを見たエステの人達は、ぎゃふんとなった。それもそのはず、彼等は自分の真っ赤っ赤になった赤ちゃんを、高額な飲料用のサプリを毎日沢山肌に塗ってマッサージして「1~2年間でこんなにきれいになりました」と言って示したのだ。大人のアトピーも、口呼吸・冷中毒・寝不足の複合で腸内の微生物が血中に入って血液がくさっておこる、治るいとまがないじんましんだとして短期的に治った完治症例を多数示したところ、以後二度と合同の講演は無くなり、顧問も知らない間に解消となった。しばらくして、全国展開していたこのエステサロンの話は聞くことも無くなった。アトピー皮炎が本当にただの腸内（口も喉も膈も腸管の一部）微生物（細菌・原虫・ウイルス）による事を明示したために、いつの間にかこの手のでたらめなアトピー治療もどきのエステサロンも無くなったのだ。ついでにダニや羽毛が喘息の原因とするアレルギー騒動も東京ではおさまった。これらがすべてバイ菌かウイルスだと言う著者の主張は、都会ではかなり幅をきかせているが、地方に講演に行くと、子育ての誤りからアトピーをはじめとする難病の原因は20年前と同じほどに遅れているのには驚かされる。東京で20年も言い続けると少しは変わるのだと今日実感している。

一体どうして現代医学で難治性疾患の多くの原因が原因不明のアレルギーと考えられるようになったのか？医学の歴史を振り返ってみよう。

西欧も日本もバスツールやコッホ、北里があらわれる近代までは、伝染病におびえていた。細菌学とともに抗血清療法も完成し、多くの伝染病が克服されたが、結核や梅毒、外科的感染症と呼ばれる殆ど無害の腸内細菌や雑菌の感染や多くの濾過性病原体（ウイルス）の感染には、明らかな抗血清（抗体）が出来ないために人類は幾多の感染症に悩まされてきた。フレミングによりペニシリンが発見され前述の多くの感染症がめざましく克服されたのが昭和40年（1965年）頃だ。この頃からわが国では病気の様相が変化して来た。昭和20年代に多発していた結核に代って、30年代にはサルコイドーシスが増加した。昭和30年代後半から高度経済成長期の40年代には、働きすぎで不顕性の感染（風邪のこじれた症状や慢性疲労症状）による体の不調症が多発し、口にはしばしば腫瘤の出来る組織球症（ヒステリオサイトーシス X）が発症した。これ迄の細胞病理像にないこれらの疾患に、かけ出しの著者は一体何が起きているのかといぶかったことを思い出す。これらの疾患はすべて何らかの感染症（寄生虫や非病原性の雑菌とウイルスを含む）と考えられたので、大人の場合には日和見感染症（体調の日和を見て口、喉や腸内の常在菌が血液を巡る）、小児の場合には自家中毒症（自分の腸内の殆ど無害の微生物が血液を巡って感染する）と呼ばれたものだ。昭和41年に東大病院の歯科口腔外科で研究と治療三昧

の生活をスタートした著者は、西洋医学の変節の過程を実に克明に覚えている。この頃は寝不足、過食、酒の過飲で軽症の膠原病、リウマチ、喘息、SLE、筋無力症、発熱等で内科を受診し、感染源が口腔内のむし歯や喉や歯肉に無いかとの問い合わせが頻繁にあった。当時一般医科では、これらは全て微生物の不顕性の感染によるとされ、その感染源の身体部位が口腔か泌尿生殖器に局限している事を常識としていた。口腔科の外来診療で初診を担当した頃には、これらの患者全ての症例で皆等しく日常生活の行動様式が、「口呼吸」と「過労の骨休め不足」と「冷中毒（冷ビールやアイスクリーム）」の常習者であった。これを改めさせると、両頬に蝶の羽の形に発赤斑のある全身性紅斑（SLE）もあっ気なく治ることに気付いた。この前後に東大医学部からインターン制度廃止のための大学紛争が勃発した。そして3年間程医学部は何もかもはちゃめちゃになった。この間に日本のみならず世界の文明国の西洋医学のすべてが変わって、駄目になってしまったのだ。

この頃、世界の医学では何が起こっていたのかを探ってみた。

まず昭和42年（1967年）末に南アフリカのケープタウンで世界初のヒトからヒトへの心臓移植が成功し、移植後18日間生存した。臓器移植の原理は1910年頃アレクシス・カレルの発案した血管縫合により動物で成功し、ノーベル医学賞を受けたものだが、これをヒトからヒトへの輸血に準じてヒトの心臓に応用したものだ。従来の対微生物に対する免疫系の抗原抗体反応とは完璧に異なる組織免疫（移植免疫）系に関する研究が全くなされないままにいきなり臨床の人体実験手術の実施で移植医学がスタートすることになった。昭和50年～57年（1975～1982年）頃にフランスのニコル・ル・ドワランが異種の鳥類の胎児の免疫寛容を利用して神経堤の交換移植を行って移植免疫（組織免疫）系が白血球の細胞膜に存在することを一連の研究で明示した。この時から対微生物の免疫学研究から組織免疫（細胞免疫）学研究へと急変し、ここに「自己・非自己の免疫学」が誕生した。

昭和42年（1967年）の心臓移植の成功以後新しい免疫学が完成する迄に、15年も経過しているが、この間に西洋医学が大きく変節している。一体何故か？まず移植医療がビッグビジネスになるということが変節の第一の理由だ。二桁違いの手術費用（1000万円～2億円）が一昼夜の手術で得られる。そのためには、まずこれまでの医学常識をすべてこわさなければならないのだ。心臓や肺や腎臓はもとより、すべての器官や臓器は、血液とリンパ液の循環でやまなわれている。この常識をまず壊す必要がある。血液に毒物や発癌物質や常在性の細菌やウイルスが巡っていれば、どの臓器や器官に難治性の癌や臓器症（心筋症や脳症）や細胞内感染症が発症するかは皆目わからない。仮に移植しても再び血液が「何らかの原因」で汚染されれば、再び移植された器官に同じ病気が発症するはずだ。この「何らかの原因」が生活習慣の「口呼吸」、「短睡眠」、「冷中毒症」、「飲酒・喫煙・常用薬習慣」、「食物嗜好」と「毒物、農薬や殺虫剤」という日常の常習的な行動様式や環境汚染、嗜好にあるのだ。これらを今日では生活習慣と呼びならわし、これで起こる病気を生活習慣病と呼んでいる。

臓器移植医療をビジネスにするには、まず臓器別医学を確立しなければならない。これは、我々の体に「血が巡っていないことになっている」医学体系でもある。「自己・非自己の免疫学」（大人のお伽話）が完成する前に、「血が巡っていない」とんでもない医療の体系がいったいどのようにして完成したのか？もう少し考える事が必要。

先のインターン廃止の大学紛争は、東大・東京医科歯科大学からスタートし日本全国に波及し、さらにヨーロッパからアメリカにまで及んだために、世界中の医科大学が大混乱に陥った。移植医療に触発されて臓器別医学が完成するとともに西洋医学の完全崩壊が密かに進む間に、このどさくさに紛れて世

界の大手ユダヤ製薬資本と結託した一部の医学者が不顕性の感染を学術的根拠が薄弱であるとして葬り去って、全て原因不明のアレルギーが疾病の本態であるとして根治治療の研究を放棄して症状のみを除く対症療法を絶対的なものとして権威をもって確立したのだ。こうして西洋医学の崩壊がはじまる。

さらにここで注目すべきことが、ひそかに進行していたのだ。臓器別医学の創始に深く関与した二つの医学者達の組織的犯罪グループの膨大な負の遺産が、アメリカのフォートデトリックの陸軍伝染病研究所に今日も存在しているのだ。その第一は、悪名高い旧日本陸軍の超法規秘密軍事組織「満州第731部隊」の石井陸軍軍医中將の行なった人体実験結果を集大成した資料で、もう一つがナチスドイツのシュミットがまとめた人体各臓器・器官の持つ固有の電磁波動特性を究明した人体実験結果の集大成の膨大な資料だ。今次大戦が終って20数年が経過して、漸くにして米国陸軍伝染病研究所で二つの狂気の生体実験データの解析が終り、臓器移植医療のビジネス化を目的としてこのデータを医学に取り入れて、ここにアメリカの臓器別医学が完成したのが昭和45年（1970年）頃であった。世界中の医学が大混乱したのを期として臓器別医学が完成するのに、あずかって力大なるものがセリエの「ストレス学説」のリバイバルでもあった。この学説は1936年に発表されたものだが、これが大きく変節して再び病気発症のメカニズムとしてはやり始めた。これには学説の中心をなす魔法の妙薬（悪魔の命名）合成ステロイドホルモン剤の開発が大いに関係がある。そして今日でもステロイドホルモンの標的器官が細胞内のミトコンドリアであり、これをやみくもに活性化するものであることを知るものは著者以外にはいないのだ。いくら教えても知らずともしないのが今の医学者だ。元来19世紀から21世紀の今日に至るまで、超多細胞（60兆個）から成る哺乳類の多臓器を有するヒトの統一個体としての臓器間や細胞間の制御系に関する研究は殆どなきに等しい。わずかにナポレオンの時代の古生物学者キュビエ(Cuvie)が提示した、比較解剖学の原理の「臓器の相関の原理」と「従属の原理」のみである。それ以外は、余りにも不完全な「セリエのストレス学説」がヒトの病気発症のしくみとして身体全体を統御する脳下垂体-副腎皮質ホルモン系が示されたのみだ。著者は、脳下垂体前葉が口腔粘膜のラトウケ嚢に由来することから、外呼吸器の口腔腸系が60兆個のおびただしい数のミトコンドリアの内呼吸の全てを液性の情報蛋白質によって制御しているヒトの統一個体の制御システムであるということ余すところなく究明する事に成功した。こうして疾患の全てが、不適当なエネルギーと殆ど無害の常在性腸内微生物の細胞内感染症であることが究明されたのである。真性のアレルギー疾患は、花粉症と金属アレルギーと「お茶のしずくの石鹼」によるものくらいしか無いのである。

V. 「西原医学 Energy-Based Quantum Medicine の治療方式」と 「西原医学 Energy-Based Quantum Medicine の臨床実践の手引き」

一、西原医学 (Energy-Based Quantum Medicine) の治療方式

現代医学には環境エネルギーと生体力学エネルギー（行動の運動エネルギー）と細胞呼吸のエネルギー産生（ミトコンドリアの働き）のすべてのエネルギーの考えが欠落しているのだ。これはまさに現代医学の盲点である。医学にこれらのエネルギーの概念を導入する事により、西原研究所では“病気を治す事が出来る正統な西洋医学”を実践している。もはや代替医療など殆ど不要である。難治性の疾患のすべては、口と喉と腸内の病原性のない常在性の細菌とウイルスの細胞内感染症によって発症している事が

本研究所の臨床研究により最近究明された。そこで著者は「ミトコンドリア病理学」を創始し共鳴診断法に基づいて、身体のどこの細胞内に感染症があるのかを見極めたうえで、その細菌やウイルスに有効な薬剤を判定し、最少量の投与により治療を行なっている。腸内細菌がいかにして身体の細胞内に大量に入るかといえば、哺乳動物でヒトだけに可能な口呼吸の他に、冷中毒のアイスや冷飲料で腸を冷やす事と、短睡眠の骨休め不足による。

治療上重要な事は、殆ど無害な数えきれないほどに常在する口と喉と胃腸管内や泌尿生殖器内の細菌やウイルスが、何故血液中に入るかをよく知る事である。上に記した三つのほぼ人類特有の生活習慣や行動様式で、口や喉を含むすべての腸管内臓器官に存在する腸扁桃のマイエル板の袋状のM細胞内のステムセル内に自動的にウイルスや細菌が取り込まれて顆粒球になり、これがリンパ液を介して血中に入り、体中の器官の細胞内に細菌を播種するのだ。ことに体温より喉や腸温や手足の皮膚温が下がると、冷血動物のシステムが作動して自動的に顆粒球が細菌を抱えるのだ。血液がくさると病気になり、血液をきれいにすると健康になるのだ。つまり血液が腸内微生物に汚染されてくさると、その微生物の細胞内感染症によって癌もリウマチも精神病も起こるのだ。汚染された血液は、口や腸の常在微生物によるものである。病原性がないので、抗生剤や抗ウイルス生剤は通常は常用量の1/3から1/5でよい。もとより環境エネルギーの制御と口呼吸を鼻呼吸に改める事が治療上必須である。体が冷えないように至適温度で温め、重力も過重とならぬように骨休めも必須である。

昭和40年頃迄はこれらの疾患は日和見感染症と呼ばれていた。乾癬症やリウマチ、ブドウ膜炎等の免疫病は在日米海軍病院では、ペニシリンで劇的に完治していたことを当時著者はまのあたりに経験していたのである。横須賀に住んでいた著者は、米海軍病院のククシー大佐の許可のもとで約2年間海軍病院をオブザーバーとしてしばしば訪れて見学し実際にこのことを経験しているので現在自信を持って正統な治る西洋医学をリバイバルして実施しているのである。これらの難治疾患治療の臨床研究を当研究所で12年余りにわたり続け結果、その成果として免疫病のみならず、癌も精神病も日和見感染症が生活様式の激変により劇症化した病態である事が究明されたのである。既に世紀の大発見として“Great medical discoveries of the 21st century. Part I: Revitalizing stagnant medicine by establishing energy-based bioscience. Disclosure of the aetiological factors of three major intractable maladies at the subcellular level: immune diseases, carcinoma and mental illness”を2011年にJBPCに発表している。これらの成果に基づいて当診療所はエネルギーに基づく量子物理学を活用した最新の西洋医学 Energy-Based Quantum Medicineを実施して多大な成果を得ている。もはや代替医療等殆ど不要な時代となったのだ。

二、西原医学 (Energy-Based Quantum Medicine) の臨床実践の手引き —生活習慣病とこれらを治す生体力学デバイスについて—

現代医学の盲点—エネルギーの失念のまとめ

現代医学には次の三種類のエネルギーが欠落している。1) 環境エネルギーとして重力・温熱寒冷エネルギー・気圧、 2) 細胞内呼吸のミトコンドリアのエネルギー代謝、 3) 動物の動きで生ずる血圧を含む生体力学エネルギー

このエネルギーの不適當で生ずる疾病が生活習慣病だ。これには身体の変形症と難治性の疾患群の二種類がある。つまり重力と生体力学エネルギーの偏りで顔・歯型・脊柱・骨盤・四肢の生理的変形症が

生じ、やがてこの変形症は時に免疫病や、精神神経疾患、癌までも含む難治性の疫病を発症する。

生活習慣病の実相

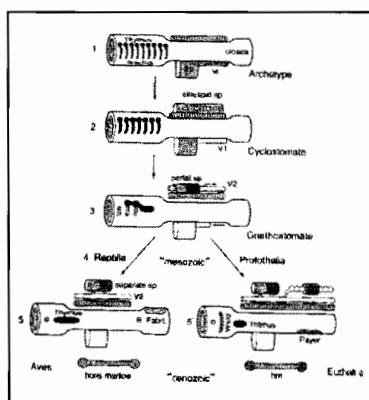
生体力学エネルギーの偏った生活習癖は1)片噛み 2)寝相 3)口呼吸 の三種類の体の使い方の偏りと誤りが中心で、この三者は互いに連鎖する。口呼吸習癖に環境エネルギーの冷中毒(寒冷エネルギー)と短睡眠(重力過重エネルギーの骨休め不足)が加わると、口と喉と腸内の微生物が自働的に腸管リンパ系のステムセル内に入り顆粒球症を発症し、血液が常在性の腸内微生物に汚染され、さまざまな器官の細胞群に細胞内感染症を発症し、結果として汚染された細胞内のミトコンドリアが障害されて細胞の働きが駄目になる。これが難治性疾患の実相だ。従って、難病を予防するには、まず変形症を防止することである。ポピュラーな変形症の症状は、顔や顎の歪み、歯列不正、顎関節症、脊柱前弯・側弯症等である。頻発する顎関節症も身体の歪みによって起こる変形症の部分症状である。

難治性疾患と変形症を治すための生体力学デバイス

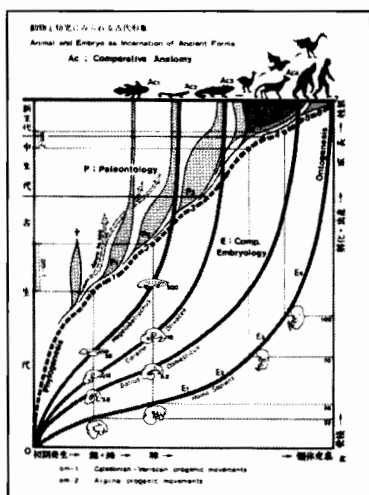
変形症とは身体の習癖による生体力学エネルギーの偏りで生ずる生活習慣病である。口呼吸で出っ歯になり、片噛みで顔が半分縮んだり傾き、これに連鎖する横向きの睡眠姿勢習慣で、自重により顔がつぶれ、上下顎の骨も歪み、歯型が崩れ顎の関節の動きが障害される。さらに顔や顎のみならず首と背骨も前弯側弯し、骨盤も変形して歪み、股関節までも不調になる。変形症は必ず難治性疾患を併発する。従って身体の変形症と難病疾患の治癒と予防にはこれらの三つの習慣を同時に正さなければならない。そのために以下のような生体力学デバイスを使用する。

- 1) 正しく噛む 鼻呼吸で真直ぐ向いて胸を張り尿道と肛門を閉鎖して正しい姿勢でカミカミクンを1日数回、300回ずつ両側で噛む
- 2) 口呼吸を止め常に鼻呼吸にする。睡眠中は美呼吸トレーナー、口唇テープ、ノーズリフトを使う
- 3) 寝相を正す背中元気クンを、寝る前に10分間使い、寝るときに膝とくるぶしを紐でゆるく縛る
- 4) 呼吸体操をする。常に鼻呼吸をして、しゃべり過ぎない
- 5) 冷中毒を改め常に腸と手・足・首をあたためる

これにより、変形症のみならず難治性疾患の予防と根治治療をすることが可能となる。



(図1) P24



(図2) P24

本稿は第13回日本免疫病治療研究会総会の講演に西原研究所の12年間に得られた成果と、この間に本会で発表した講演を総まとめしたものに最新の事象を加えて集成したものである。

VI、おまけ
一、III章の英訳

III. Blind Spots in Modern Medicine and the Establishment of Energy - Based Quantum Medicine

1. Quantum Physics and Gravity Energy

In modern medicine there is a complete lack of concepts in energy as well as quantitative physics, which have been the greatest archives of science in 20th century. Today, there are three kinds of energies which are overlooked in medicine, viz: 1) environmental energies, 2) energy metabolism of organelle mitochondria, and 3) biomechanical energies, evoked by animal movement in behavior. By means of these improper energies humans can become more susceptible to maladies. Over 20 years ago the author developed artificial bone marrow chambers made of porous bioceramics, which are implanted in-vivo into muscles, by means of a hybrid method by which highly differentiated hemopoietic cells conjugated with osteoblasts are induced by means of the gene expression of recipient mesenchymal stem cells around ceramics via hydrodynamic blood stream energy, which is based on gravity force, being concomitant with streaming potential. This research disclosed that gene expression of stem cells via streaming potential induce cell differentiation.

The gravity effects upon blood pressure indirectly through animal behavior and movement concomitantly induces streaming potential. Gravity can indirectly induce gene expression via streaming potential. After that, the system of the animal body changes. This is the driving force of evolution. From these aspects complete axioms of quantum physics can be proven as follows: 1) The cosmos is constructed with energy and mass-substance, viz, space, time, and substance with mass. Time and space are energy; 2) Gravity is an essential part of substance with mass, and attracts only substance with mass (Newton, The law of gravitation) and never attracts energy without mass (Nishihara). Acceleration and gravity cannot be differentiated (Einstein). Substance with mass can be accelerated (Newton), but energy without mass can never be so (Nishihara). Therefore, gravity never attracts energy without mass. Consequently, black holes are the state of light being ceased; 3) Light and gravity are essential parts of substance with mass (Nishihara). They make up each other. Heating a vacuum to high temperatures emits no light. However, heating a substance with mass (even gas) molecules emits light. At that time, emitting molecules lose mass at the quark level (Nishihara). Energy and elementary particles as well as electrons have inherent velocity dependent upon absolute temperature and the medium (Nishihara); 4) Intermediary matter between substance with mass and energy are electrons as well as elementary particle with mass (Nishihara); 5) Multicellular animals utilize gravity force to live without sensing ultra-faint gravity energy. The gravity energy is converted into hydrodynamics, which is concomitant with streaming potential by animal behavior or movement. Via streaming potential gene expression of mesenchymal stem cells are triggered. After that, life activities are maintained in animals. Thus, for the first time, animals can be recognized as entities under force of gravity in quantum physics. Finally, the last and greatest riddle of gravity in physics is disclosed. Successful results of quantum physics being introduced into medical use are revolutionizing diagnostic methods of CT scanning, NMR, and PET. These are results obtained from computer tomography holding entanglements of quarks which come from research success in electron spin resonance or nuclear magnetic resonance and are related to the

theory of quantum electrodynamics.

2. Establishment of Mitochondrial Pathology

The life phenomena of cells in mammals completely depend upon mitochondrial energy metabolism. Without this energy generation life activity and all turnover of metabolic maps suddenly stop. The former riddle of vitalism was based upon the lack of the concept of energy generation by mitochondria. The origin of the wonder power of vitalism in life is based directly on the mitochondrial energy generating system. In conventional medicine diagnosis of pathology by microscopy, the cellular pathology by Virchow, is carried out even in those of carcinoma now. Instead of cellular pathology, **mitochondrial pathology** (Nishihara) has been established by the author.

Maladies at the subcellular level based on mitochondrial pathology are brought about by mitochondrial deterioration by means of the following six factors:

1. toxins, poisons and agricultural chemicals,
2. malnutrition, including water, minerals and oxygen,
3. parasites and intracellular parasitic microbes,
4. inadequate environmental energy,
5. incompatible transplanted organs and transfusion, and
6. biological energy: loss of intimacy, stress, spirituality, faith, fear.

The main role of biological energy is dependent upon the activity of mitochondria in brain neurons. A person who has a good sixth sense can feel mitochondrial resonance with some substances or phenomena. These causes of maladies at the sub-cellular level are carried through the bloodstream, except energy, which works directly on cytoplasmic mitochondria from outside the body.

CT scans and NMR are holding in film entanglements at the quark level so much information related to maladies, e.g., toxins, malnutrition, parasites, microbes, and biological energy.

3. Quark-Entanglement and Mitochondrial Bioresonance Methods

From the 15th century, water dowsing has carried out to search for veins of ground water. Streaming water, but not oil has necessarily evoked streaming potential underground, because weak bipolar water molecules momentarily binds electrically with rock, ceramics, i.e., oxidized minerals or soil (earth). Immediately after bind shears by power of the stream. Then the electrical potential evokes underground. This weak streaming potential has resonance phenomena with the mitochondria in brain neurons of the dowser, which control the finger muscle contractor.

After that the digital muscle of the tester's hands contract and the wooden wand moves automatically. After all, the dowser can detect the presence of water veins under ground. This method is an application of bioresonance phenomena between mitochondria in neurons of humans and streaming potential in ground water.

Application of this method to intractable maladies, diagnosis and therapeutics become quite easy. Just like deciphering a cryptogram, we can detect the causes of intractable diseases by means of bioresonance between the tester's mitochondrial electron spin in neurons of the brain and pathogenic microbes or toxins, nutritional deficiencies with effective medication, e.g., antibiotics, antiviral agents or detoxifying medicines. By means of bioresonance methods using the mitochondrial resonance of brain neurons, which reflect the contraction power of somatic muscles, we can detect not only deteriorated mitochondria in affected organs on CT scanning film, but also effective nutrition, antiviral agents, antibiotics, and bifidus factors. All cells except matured erythrocytes have thousands of mitochondria, which carry out inner respiration via the electron transmitting

system. If intracellular infections occur, this electron system is immediately disturbed. This can be detected via mitochondrial resonance test. This is the newly established Mitochondrial Resonance Diagnostics (MRD). By means of this new method the cures of intractable diseases become quite easy.

Intractable immune disease, carcinoma, as well as mental illness are brought about via oral, nasal, throat, gastro-intestinal non-pathogenic enteromicrobes, which are disseminated by granulocytes (leucocytes) and evoke intracellular infections in various organs, tissues, or blood vessels.

Therapeutics are all the same and mitochondrial activation is the most-important. A complete cure is the proof of mitochondrial activating therapeutic methods, and maladies can be completely cured if it is not too late.

文献

1. Nishihara K. (2008) Disclosure of Major Causes of Mitochondrial Mutation by means of Molecular Biology Part1. *Biogenic Amines* 22(4-5): 99-114.
2. Nishihara K. (2009) Human Specific Intractable Immune Diseases - The Hypothesis and Case Presentation to Disclose the Causes and the Cures. *Biogenic Amines* Vol. 23, issue 2, P55-74
3. Nishihara K. (2009) No. 4 Disclosure of The Causes of Mental Illness by Means of Diagnosis Ex-juvantibus via Bi-Digital O-Ring Test *Biogenic Amines* Vol. 23, issue 4, P253-273
4. Nishihara, K. (2010) Human-specific intractable immune diseases and mitochondrial deterioration. *Journal of Biological Physics and Chemistry* 10 P135-144
5. Nishihara, K., *Oral and Maxillo-Facial Diseases and Biomechanics – New paradigm for oral medicine.* Ishiyaku – publisher Tokyo (2000)
6. Nishihara, K., *Stomato-Facial Neuro Cranial Medicine.* Ishiyaku – publisher Tokyo (2009)
7. Nishihara, K., Verification of Use and Disuse Theory of Lamarck in Vertebrates Using Biomaterials, *Biogenic Amines* 18 (2003b) 1-17.
8. Nishihara, K., Establishment of a New Concept of the Immune System, Disclosure of Causes, and Development of the Therapeutic System of Immune Diseases. *Biogenic Amines* 18 (2004a): 79-93.
9. Nishihara, K., Research on the Evolution and Development of Autonomic Nervous System. *Biogenic Amines* 18 (2004b) 95-106.
10. Nishihara, K., Trilateral Research on Neural System and Biogenic Amines: Disclosure of the Major Causes and Mechanisms of Human Characteristic Neurocerebromuscular (Psychosomatic) Disorders. *Biogenic Amines* 19 (2005) 197-208.
11. Nishihara, K., Disclosure of Mechanisms of the Mammalian Life System and Selye's Stress Theory. *Biogenic Amines* 20 (2006) 171-184.
12. Nishihara, K., Disclosure of Causes of Human-Specific Intractable Immune Diseases –Mitochondrial Deterioration due to Intracellular Infections. *Biogenic Amines* 21 (2007a) 23-41.
13. Nishihara, K., Development of Therapeutics for Human-specific Intractable Immune Diseases by Means of Bio-energy Resonance - Remedy of Mitochondrial Deterioration Due to Intracellular Infections Using Bi-Digital O-Ring Test. *Biogenic Amines* 22 (2008a) 75-84.
14. Nishihara, K., Disclosure of Major Causes of Mitochondrial Mutation by Means of Molecular Biology Part1. *Biogenic Amines* 22 (2008b) 99-114.
15. Nishihara, K., Human Specific Intractable Immune Diseases - The Hypothesis and Case Presentation to Disclose the Causes and the Cures. *Biogenic Amines* 23 (2009a) 55-74
16. Nishihara, K., No. 4 Disclosure of The Causes of Mental Illness by Means of Diagnosis Ex-juvantibus via Bi-Digital O-Ring Test. *Biogenic Amines* 23 (2009b) 253-273
17. Nishihara, K., Human-specific Intractable Immune Diseases and Mitochondrial Deterioration. *Journal of Biological Physics and Chemistry* 10 (2010) 135-144
18. Nishihara, K., Great Medical Discoveries of the 21st Century Part 1: Revitalizing Stagnant Medicine by Establishing Energy-based Bioscience. Disclosure of the Aetiological Factors of Three Major Intractable Maladies at the Subcellular Level: Immune Diseases, Carcinoma and Mental Illness. *Journal of Biological Physics and Chemistry* 11 (2011) in print

二、小児科医からの質問に対する回答 I

メール拝読しました。これ迄子育ての本を数冊出版しました。

15年前くらいから赤ちゃん相談室を行なってきました。質問集等 Q and A が西原ワールドのアート医研の中に入っております。

今日の我が国の子育ては世界中の文明国で最悪の状態です。これは1978年にアメリカで起きた人類の子育て法を革新することになる乳児ボツリヌス菌症事件とその調査結果とヒトの哺乳期間とその時の赤ちゃんの腸の特徴の究明という重大な成果と、それにもとづく早期離乳食の排除、2才過ぎまで母乳中心とする WHO の変更など米国のみならずヨーロッパ諸国の育児法の革命的変革について、我が国の医科大学では、小児科のみならず細菌学でも免疫学でも一切教えないためです。実は欧米が気づいたこの育児法こそが昭和40年迄続けられていたわが国の伝統的育児法だったのです。昭和55年に大々的母子健康手帳が改正され、2歳頃まで母乳中心であった日本育児法を古いアメリカ型の4、5ヶ月離乳食に改変した小林登先生が、その失敗を隠すためにこの米国の事件の顛末を一切日本中の医学の世界から排除して日本の赤ちゃんを犠牲にしているためです。

このまま進めば、不登校、発達障害、アスペルガー、自閉症が我が国だけ極端に増え続けます。ひきこもりは今日の70万人からさらに増え続けるでしょう。これらはすべて小林登先生につくられた業績とも言える病人達です。これで経済活動としての国民皆保険医療産業が大変活性化したとして、小林先生は勲二等の勲章を受けております。今や日本医学は皮膚科をはじめとして治せない国策医療が横行しています。ここに伝統育児法の実例例（図3、4 P59）と現在の小児科医で誰一人として治せない小児の育児障害を伝統育児法でいとも簡単に完治させた西原流育児法の実例例を（図5 P60）に示します。

さておしゃぶりの件ですが、欧米では出産直後初乳とともにおしゃぶりを与えます。すると図6のように4、5才迄おとなしく舌を動かしながら吸啜します。哺乳動物の胎児は（図7 P61）のように原始脊椎動物のサメと同様に舌と心臓は連続していますから、出生直後おしゃぶりをを使うと、舌筋が自動的に吸啜（蠕動）運動をして脳と心臓が急激に発達します。これを怠ると、口呼吸と相まって発達障害等に陥る事もあります図10、11。おしゃぶりの使用は、本人によく言って聞かせる事が何よりも大切で、口に含ませて吸啜の補助として前後にゆすると吸い付いて来ますので、その後自発的に吸うようにします。「これをすれば、かゆみや喘息や不調が治るよ」と言って伝えます。生後1週間でことばがわかります。図8

（P61）に2才迄母乳のみで育てて、おしゃぶりを5才迄使った子の歯型の2才半から7才迄の加齢による変化を示します。おしゃぶりで咀嚼が可能となると乳首で開咬した歯型も3～4ヵ月の毎回30回の咀嚼でわけもなく正常咬合になります。このことは歯科大学の小児歯科の教授も知らないことです。

小児科医からの質問に対する回答Ⅱ

シアーズ博士夫妻のベビーブック（主婦の友社）が宜しいかと思えます。同社からはシアーズ博士のチャイルドブックも出ています。拙著「赤ちゃんの生命のきまり」（言叢社）には、乳児ボツリヌス症事件直後にニューヨークで米国の産科小児科医のもとで出産と育児を経験した方の手記が出ていますのでご参考下さい。また同書の「人工乳首の構造とおしゃぶりの効用に関するドイツの研究」の項（P230）にこれを使わなかった時に生ずる口呼吸（舌下垂症）の全身に及ぼす影響が示されています。

1956年に発表された「顎の異常の予防と予防法的諸器具」（ドイツ歯科医学報）はナチス敗退後のドイツの子供が図に示す今日のわが日本の子供のごとく顔がつぶれ歯型がごちゃごちゃで出っ歯になり背骨が前弯・側弯しひどい事になりましたが図12（P63）、その昔きちんとしていたドイツの子供達がよらよらになった様を見て「これは一体どうしたことか？」と考える一群の医学者がいて、ミュンヘン大学で研究をはじめました。その結果大戦前と後の顕著な違いが子育て法にあり母乳育児と戦災後のでたらめ育児法にある事に気付いたので。そしてヒトの哺乳動物の本当の授乳期はいつなのかを、原始の生活に近い当時のアフリカ（シュバイツアーの頃）で研究しました。ヒトの本当の授乳期間は5才です。アフリカでは昔は5年に1度しか産めず一人しか育てられなかったのです。授乳期間中はホルモンの関係で子供も出来なかったからです。ちなみに霊長類の授乳期間は、研究者により多少は異なりますが、オラウータンが7年（3年の説もある）、チンパンジーがヒトと同じ5年、ゴリラ4年です。御承知のように授乳期間中にお乳以外の物（特に蛋白質）を哺乳動物の赤ちゃんに与えると多くは死んでしまいますが、死なないうまでもテンカンになったり大病します。これは授乳期間中（ヒトは5才迄）に腸内細菌がパイエル板の袋状のM細胞内のステムセルに自動的に取り込まれ、これが顆粒球となって血中をめぐり体中の細胞群に播種（disseminate）しことに内頸動脈経由で、脳下垂体の前葉に入る上下下垂体動脈を經由して同名門脈に入ると、ここから脳内の脳脊髄液（リンパ液）内にバイ菌を抱えた白血球（顆粒球）が自在に入り込んで巡ります。御承知のように下垂体の前葉はラトウケ嚢という胎児期の口腔粘膜に由来するため、本当の脳に存在する脳血液関門が無くて、バイ菌やウイルスを抱えた顆粒球はフリーパスです。それで授乳期（1才半頃）にヒトで生エビ、刺身、貝、多量のカゼインやグルテン（犬でも生肉）を与えるとヒトでは1年半経過時頃から熱性痙攣にはじまりテンカンやアナフィラキシーの発作をおこします。私はすでに数名の幼児てんかんの子達（3才～5才）と18才、24才、55才の成人も完治させた経験があります。この子等も成人達も必ず「口呼吸病」患者です。

一般の研究では欧米ではヒトの授乳期は、1才半とされていますが、日本では古来から昭和30年～40年代までは、2歳半頃まで母乳中心でした。そして明治以前は、福沢諭吉も多くの歴史上の人物も5才頃までお乳を吸啜していたと多くの書にあります。今日では、シアーズも9ヶ月頃から離乳食をはじめるよう、ただし母乳は欲しがったら3才半でも与える

ようにとあります。私は子育ての相談では、母乳が出なくなっても欲しがったら4、5才迄自分で気付いて止めるまで与えるように指導しています。そうすると哺乳動物として最も重要な吸啜運動（鼻呼吸と心臓と脳の働きとそれにつづく咀嚼運動）の発達が十分に得られ欲求不満の全く無いすこやかでおだやかな子が育つからです。

今日ではヒトの子が本当に母乳のみで育てられるのは何歳までかは、世界的にわからなくなっています。オーストラリアの未開地のアボリジニは3才までとあります。そこで私は可及的に母乳と乳児用ミルクのみで何歳までが最適かを赤ちゃんの両親とともにきめこまかく観察しながら試みた事があります。その赤ちゃんは小児科医の指導で5ヶ月の時に離乳食はじめにかぼちゃを食べさせられて真っ赤っ赤になつた医者の子のケースです。育児相談のついでにその子の父親（医者）は私（西研）の研修生となりましたので緻密に指導が出来ました。実に賢く見事に母乳と粉ミルクのみで、1才、2才、2才半と育ちました。父親は3才迄を強く希望しましたが、余りにも一般とかけ離れてしまうので2才7ヶ月で、純白米のミルク粥から乳児食をはじめました。常に「おしゃぶりをしようね」、「今食べると病気になるからね」、「噛めるようになったら30回噛んで食べようね」と教え諭すのはもとよりです。こうして育つた子は4才の幼稚園では他の子より1才～2才年上のごとく指導していたそうです。

ひるがえって、わが国の現状をみると、米国の乳児ボツリヌス症事件（1978～79）で米国が戦前の日本の育児法（2歳過ぎまで母乳中心）に変えた1980年に東大の小林登先生が約20年がかりで準備した旧い米国式育児法（この時に米国では完全否定された）スポック博士の育児方式（日本への導入は昭和41年東大高津教授監訳）を日本流に勝手に変えた奇妙奇天烈な新スポック育児法（離乳食、着物から紙おむつ、下着、靴下等全部駄目なもの）を全文明世界の育児法に逆らつて厚生省の強権のもとに「母子健康手帳の改訂」として実施しました。そして生まれ出て来た赤ちゃんのトラブルである赤ちゃんの緑便につづくアレルギーマーチと呼ばれる離乳食アトピー、喘息、肺炎、中耳炎、膀胱炎等々に小児科医は一切対処するすべを知りません。そしていまだに赤ちゃんは緑便でいいのだと主張しますが、緑便はまぎれもなく赤ちゃんの腸カタルです。一方国策として進めるアイスクリームと4℃の冷飲料や冷酒、ビールの国民皆冷中毒政策（これで税収が増えるうえ病人も増えるので国と医者が大喜びする）で妊婦の流産死産の増加と出産時の大出血（冷中毒で骨髓造血巣が腸内常在菌に感染して第十二止血因子が欠乏する）、さらに男女とも無精子症や生殖巣の感染による子宮内膜症や子宮筋腫、卵巣囊腫等々で国民皆病人です。冷中毒の妊婦から運良く生まれた子でも、母乳で真っ赤っ赤になるのは、世界中の小児科医が治せません。ヨーロッパからメールで私の赤ちゃん相談室に相談がありますが、あちらでは HALF でも日本の母親の子だけが真っ赤っ赤になって、向こうの小児科医も、「こんな子は見たことがない」と言つて日本の小児科医同様にステロイド軟膏を手渡してさじをなげるそうです。ヨーロッパでも日本の赤ちゃんは日本式のきついゴムのズボンと靴下をはいていますがこれは乳幼児の虐待に等しいものです。母乳で真っ赤っ赤になるのは冷中毒の母親の血液と母乳が母親の口腔と鼻腔や咽喉部と胃腸内、膣内の殆ど無害の常在性の微生物（ウイルスと細菌）で汚染されてくさっているためです。これは、4℃の飲食物で腸内細菌が自動的に顆粒球に大量に

取り込まれて汚染され、それが体中を巡るためです。わが西研では、このような母親の血液と母乳を光学顕微鏡で記録して共鳴テストをすると、全症例に口腔内の常在菌の感染が認められます。くさった母乳と血液に対する有効なものも共鳴で解ります。常在菌やウイルスですから常用量の 1/3 から 1/5 の抗生剤か抗ウイルス剤をお湯と飲まして体を温めることで、その場で 1 時間後には血液と母乳はきれいになります。この治療を母親が続ければ、3、4 日後には、遅くとも 1 週間後には赤ちゃんはピカピカにきれいになります。

さて、小林登先生は米国が昔の日本式に改めたその時に昭和 55 年に駄目アメリカ式を日本に導入したために日本国をどん底の国に陥れた方です。それまで日本の子は、中学高校生で学力は世界 1 でしたが今は世界で 18 位です。現在引きこもりが 70 万人ほどいますが、これはすべて小林先生の作品で昭和 55 年以後に生まれた赤ちゃんの三ツ子の魂を「口呼吸」と「離乳食」と冷たく育てる等 7 つの誤りで徹底的に虐待されて育った子等の生長した姿なのです。最高齢者が今 32、3 才になっています。引きこもり以外にも、不登校、多動、狂暴、発達障害、自閉症、アスペルガー等々は、すべて昔の日本には殆ど皆無に等しかったものです。1980 年には、世界中が米国にならって旧日本式育児法に変えたその時に、日本が破滅コースをたどる育児法を全面的に導入した小林先生は、自分の誤りを隠蔽するために、アメリカで起こった乳児ボツリヌス菌症事件（詳しくは拙著赤ちゃんの生命のきまり参照）を日本全国の医科大学・大学医学部における医学教育の小児科はもとより免疫学でも細菌学でも一切教育に取り入れる事を禁じているのです。だから日本の小児科はもとより一般医者や医学者は殆どこのことを知りません。私が赤ちゃんを古い日本式育児に戻さないと日本がつぶれるとしてこの事を声を大にして書物に記したり講演（学士会の夕食会 12 年前）で述べて、朝日新聞に取り上げられ日本テレビが取材に来て、すべて小林先生につぶされてしまいます。国策医療で国民を全部出来そこないにしてしまっても、子育て産業の育成と赤ちゃん患者の急増で医療産業と経済活動の活性化による税収増加により小林先生は国から愛でられて随分前に勲二等を受けています。

別添の新聞（図 13）で「育児法を昔に戻せば発達障害はなくなる」とする私の図入りの論文に基づいて超党派で行った国会議員の会も、小林先生一派の殴り込みであえなく資料が焼却処分となりました。

今日本は細分化医療と、まるで血液が巡っていないような臓器別医療ではちゃめちゃんに厚労省と結託した治せない医療が横行しています。一人一人の医者が、大人から赤ちゃんまで、臓器別とは無縁にくさった血液が巡っているためだけで病んでいる患者を治す方向に転換すれば、冷中毒と口呼吸と骨休め不足を改めるだけで昔のごとく国民全体が健康生活は得られることを悟るべきです。そして「口呼吸」「冷中毒」「骨休め不足」を追放し「美呼吸」「体を温める」「正しく充分なる睡眠」の励行を国民運動としましょう。

図3



本能と伝承の日本育児

乳幼児・育児のポイント

1. いつもニコニコ上機嫌
2. 鼻(美)呼吸
3. 上向き寝
4. 黄金色の便(1~2回/1日)
5. 子ぶりでピカピカ
6. 手足があたたかい

7つの誤りを正す

1. 2歳過ぎ迄母乳中心
2. おしゃぶり4,5歳迄
3. 常に黄金色の便
4. ハイハイを十二分に
5. 温かく育てる
6. 上向き寝(ふわふわ枕)
7. きもの・おしめ ゆるゆるに



図4



西原育児
哺乳動物の
生命のきまり
を守る

日本育児
本能と伝承



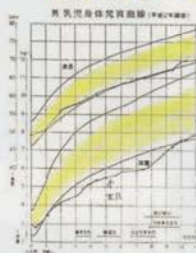
1歳半まで母乳のみ



日本育児



2歳9ヶ月まで母乳のみ



母乳
ハイハイ
おしゃぶり

西原育児

おしゃぶりを正しく使う おしゃぶりで吸啜 → 咀嚼に移行



B 2歳半の歯型



C 3歳半の歯型



おしゃぶりで理想的な歯の並びに

図5



日本中の小児科・皮膚科で治せない

昭和55年の全滅コース
でこうなる



人工乳トラブル
離乳食トラブル
母乳トラブル
スポーツ(冷え)トラブル
口呼吸



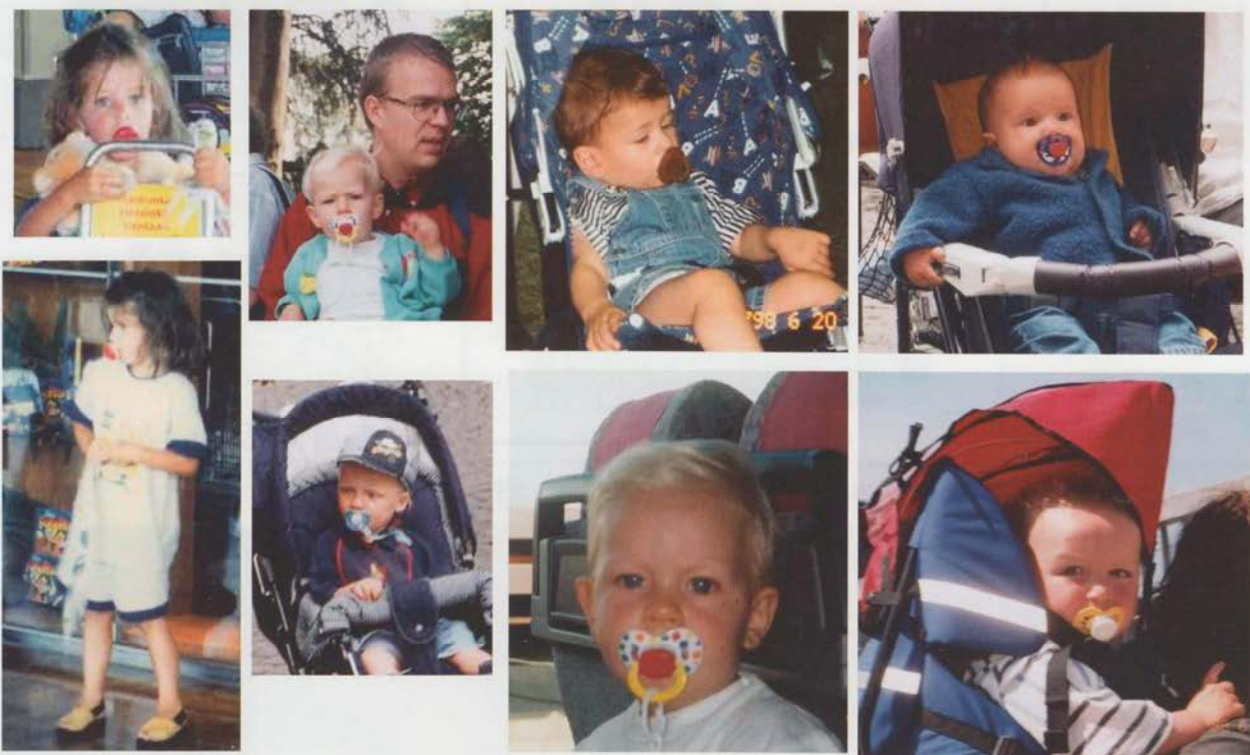
育児法を昔風に戻すと
短期的に治る



西原流
(日本伝統育児法)

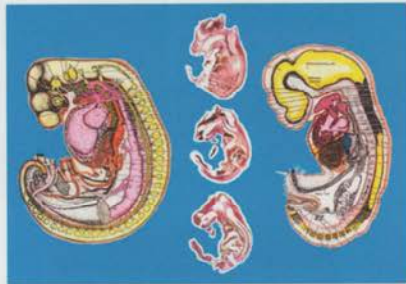
図6

1955年 ドイツ ミュンヘン大学 アフリカの土人を参照
5才迄授乳期・ヌーク社でおしゃぶり4-5才迄

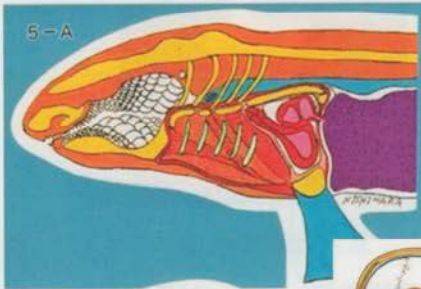


戦勝国のアメリカが導入 日、仏がしない IGA腎症 1位2位

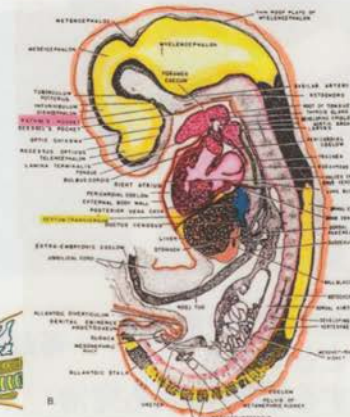
図7 おしゃぶりなし
口呼吸
→阿呆化
(大脳化の逆)
呆=口呼吸



おしゃぶりで脳と心臓が元気
臨床系統発生学



サメの舌と心臓



臨床系統発生学

おしゃぶりで心臓 ↑
ハイハイで血圧が ↑

哺乳動物の胎児
舌と心臓がサメと同じで
つながっている

図8

歯はどうして生えるのか？



2歳半



2歳9ヶ月

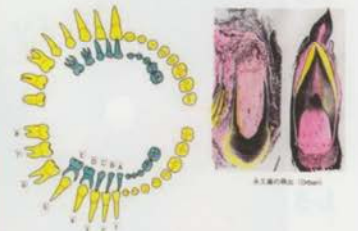
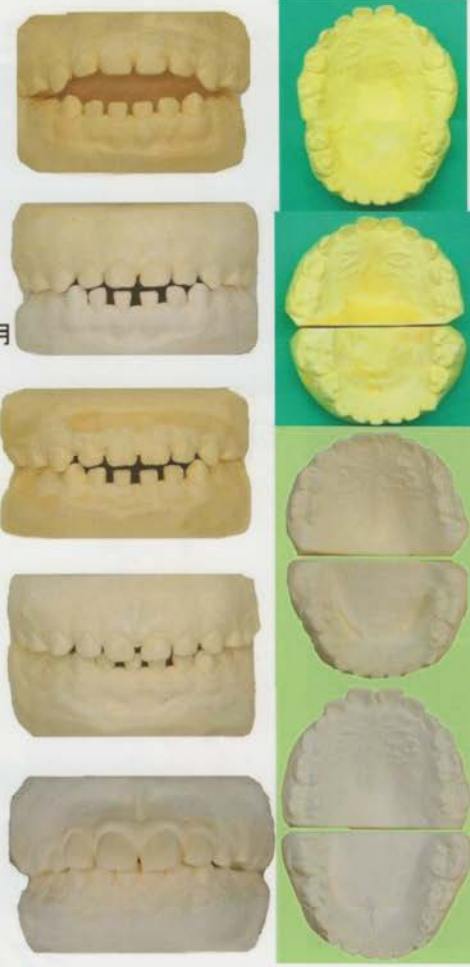


4歳

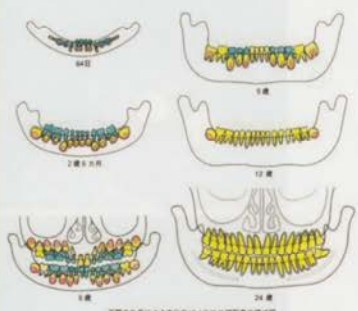


5歳

7歳



年齢	乳歯	永久歯
乳歯生時	20	0
2歳半	20	0
4歳	20	0
5歳	20	0
6歳	20	0
7歳	20	0
8歳	20	0
9歳	20	0
10歳	20	0
11歳	20	0
12歳	20	0
13歳	20	0
14歳	20	0
15歳	20	0
16歳	20	0
17歳	20	0
18歳	20	0
19歳	20	0
20歳	20	0
21歳	20	0
22歳	20	0
23歳	20	0
24歳	20	0
25歳	20	0
26歳	20	0
27歳	20	0
28歳	20	0
29歳	20	0
30歳	20	0
31歳	20	0
32歳	20	0
33歳	20	0
34歳	20	0
35歳	20	0
36歳	20	0
37歳	20	0
38歳	20	0
39歳	20	0
40歳	20	0
41歳	20	0
42歳	20	0
43歳	20	0
44歳	20	0
45歳	20	0
46歳	20	0
47歳	20	0
48歳	20	0
49歳	20	0
50歳	20	0
51歳	20	0
52歳	20	0
53歳	20	0
54歳	20	0
55歳	20	0
56歳	20	0
57歳	20	0
58歳	20	0
59歳	20	0
60歳	20	0
61歳	20	0
62歳	20	0
63歳	20	0
64歳	20	0
65歳	20	0
66歳	20	0
67歳	20	0
68歳	20	0
69歳	20	0
70歳	20	0
71歳	20	0
72歳	20	0
73歳	20	0
74歳	20	0
75歳	20	0
76歳	20	0
77歳	20	0
78歳	20	0
79歳	20	0
80歳	20	0
81歳	20	0
82歳	20	0
83歳	20	0
84歳	20	0
85歳	20	0
86歳	20	0
87歳	20	0
88歳	20	0
89歳	20	0
90歳	20	0
91歳	20	0
92歳	20	0
93歳	20	0
94歳	20	0
95歳	20	0
96歳	20	0
97歳	20	0
98歳	20	0
99歳	20	0
100歳	20	0

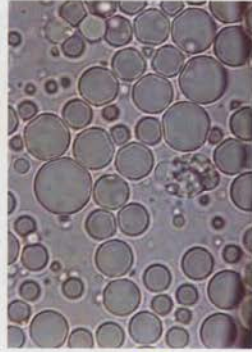


力源が無ければ
歯は生えない

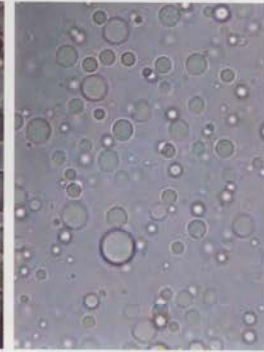
図
9



腸の細菌に
汚染されている母乳



-3



+2



母乳で皮膚疹



玄米と漢方⇒中止

母親「口呼吸」「玄米食」「常温水(冷中毒)」
で血液と母乳がくさって母子ともに病気
母親を治療して難病が完治すると赤ちゃんも完治

母親の病気

緑内障	お母さん	
潰瘍性大腸炎	目 右	-1 → +2
皮膚湿疹	左	-1 → +2
完治		

図
10

①
眼
R-2
L-3



② 発達障害 2歳7ヶ月 離乳食でアホ



③



⑤ 赤ちゃんのやり直しで完治

④
眼
R+2
L+2

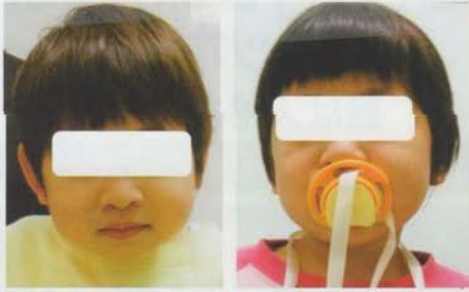


5ヶ月後完治

図11

発達障害 3歳

2483



2011年5月27日 2011年6月20日
1ヶ月で治る



2012年2月9日

2歳10ヶ月頃から毎日アイス
3歳2ヶ月で少ししゃべるように
なったが遅い
治療を受けてから態度が落ち着いた、
体温も上がり寝つきが良くなった
11月には言葉がはっきりしてきて言葉
の数が増え身体も大きくなった
ききわけが良くなり片付けが出来る
ようになった
12月に中耳炎になるがその後、現在
まで一切病気にはかかっていない
今じゃクラス一番のダンス上手

離乳食でんかん・喘息

5才

熱性ケイレンにはじまる

おしやぶりと加温・すべて
植物性たんぱくにしてとにも完治

口呼吸で喘息
1歳半で生エビを
食べて1年後に
てんかん発症

抗けいれん剤服用 → 中止

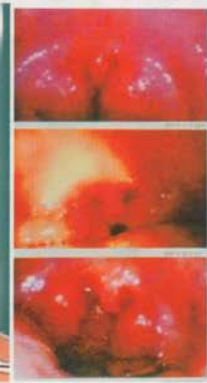


図12

呼吸・食事・睡眠の作法の完全欠落



講道館長 上村 春樹 さん(59歳)

子供は全員口呼吸で歯が口からあふれる



も日本では提供者見つからない

子どもの心臓移植議論を
遺族が法改正求め働きかけ

【東京24日時事】心臓移植の議論が激化する中、心臓移植の提供が困難な子どもを救済するため、遺族が法改正を求め働きかけを行っている。心臓移植の提供が困難な子どもを救済するため、遺族が法改正を求め働きかけを行っている。

口呼吸により心筋症→移植してもまた心臓は駄目になる

斎藤環

SIGN OF THE TIMES
2009-2010
Senshi Saito

ひきこもりから
見た
未来

ひきこもりは
爆発する！

20年後、ひきこもり第1世代、は65歳
その時、私たちは彼らを受け入れるだろうか
いま何もしなければ、私たちが"閉居"になる！

内閣府は今年2月、「ひきこもりに関する実態調査」を実施。結果を7月24日に公表する。

2
府が調査

当は「この結果は川上憲人・東京大学大学院教授が05年に報告した厚生労働資料を基に推定されたものと見られる。」

迫り来る「2030年問題」に警鐘
セーフティネット構築が急務

広義のひきこもり群69・6万人

2012年(H24)6月29日 朝日新聞朝刊

悪代官(官僚)国家ニッポン

顔は人格を表す

医療の素人 行政の素人 記憶にない



エイズの血液製剤事件の
国会喚問時

国策医療の実践者
国民は収奪の対象



森田太郎 鷗外
(軍医中將)東大
脚気で日本兵
3万人病死



石井四朗
(軍医中將)京大
731部隊
全員極東裁判免責
戦後の日本医学を占拠



臺浩先生
精神科教授(東大)
ロボットミ
手術を多数実施



海軍兵学校
→東大医学部
小林 登先生
日本の赤ちゃん
全滅作戦



東大医学部長時代
白血病にしたて
治療するとうわさ
たえない
一謀病理学者(東大)
高久史磨
医学会会長

「子育てで発達障害予防」国会議員が勉強会

超党派の国会議員66人でつくる「親学推進議員連盟」が、「伝統的な子育てで発達障害を予防できる」という趣旨の勉強会を開いたとして、発達障害者の支援団体が28日、議連会長の安倍晋三元首相あてに、勉強会で使われた資料の破棄などを求める要望書を送った。資料には、脳の先天的機能障害である発達障害について「予防は簡単、治療は大変」などと記されているといい、「科学的根拠を

「科学的根拠欠く」 支援団体が抗議

欠く」と抗議している。要望書を送ったのは発達障害の当事者や研究者らでつくる日本発達障害ネットワークと、NPO法人アスペ・エルデの会。勉強会は5月下旬にあり、民間教育団体の所長と、大学教授が「発達障害を予防する伝統的子育て」をテーマに話した。同ネットワーク理事長の市川宏伸・東京都立小児総合医療センター顧問は「育て方で後天的に生じる発達障害はない。こうした考え方は

偏見を助長する」と批判する。議連は今春、親への適切な育児情報を提供する「家庭教育支援法」の制定を目指し発足。事務局長の下村博文衆院議員が、勉強会の内容をブログで紹介すると抗議が相次いだ。議員は今月2日、ブログで「誤ったメッセージになった。深くおわびする」と謝罪したが、要望書については「講演内容への要望なので、講演者が対応すべきだ」と話した。(帯金真司、田中陽子)